

<エッセイ：小特集「パンデミックに思うこと」>
アマビエからヨゲンノトリまで：「疫病退散」についてのお守りたち

著者	姜 ？
雑誌名	日文研
巻	65
ページ	28-35
発行年	2020-09-30
URL	http://doi.org/10.15055/00007546

——「疫病退散」についてのお守りたち——

アマビエからヨゲンノトリまで

小特集「パンデミックに思うこと」

姜 嫄

二〇二〇年のCOVID-19の流行拡大は、世界を灰色に染めました。ウィルスの高い感染力と感染規模の大きさ、そして犠牲者数の拡大により、社会はパニックに陥りました。その上、外出自粛を余儀なくされ、通常の勤務や社会生活を送ることが出来なくなったことは、人々に更なる心理的打撃を与えました。この未曾有の事態に、江戸時代の瓦版アマビエが、日本国内で再度脚光を浴びることになりました。多くの商店や企業が、祈りを込めてアマビエの図柄を商品に印刷し、その愛らしい姿は、



図1 アマビエのお酒（本家松浦酒造の商品広告：<https://narutotai.jp/blog/?p=2596>）

てきました。日文研の図書館には、そういった想像性を表現した絵画資料が、たくさん所蔵されています。また、九州国立博物館所蔵の永禄一一（一五六八）年に書かれた『針聞書』にも、病気の原因を説明するものとして「腹の虫」が描かれています。これらの資料は皆、目に見えない病気の原因に対する日本人の豊かな想像力と、比喩的な芸術性を反映しています。

更には、妖怪に起因する病気の鎮圧を、神に祈願する必要もありました。疫病、とりわけペストの爆発的感染が発生した時代、目に見えない脅威に直面した人々は、想像の世界で神の守護を求める他に、為す術がありませんでした。こういった守護神のほとんどは、人格化されたものでした。例えば、アジアで信仰されてきた神「鍾馗（ショウキ）」は、防災とお祓いを司



図2 歌川芳虎「麻疹後の養生」（日文研田
文庫所蔵）

人々の灰色に染まった生活を明るく照らす、一条の光となりました。

歴史上、世界のほとんどの地域が、小規模な感染症から、大規模なペストに至るまで、数々の疫病の恐怖を経験してきました。生物学によって病原体の認識が改められるまで、未知なる伝染病の神秘性は、人々の豊かな想像力を掻き立て

る神として広く認識されています。日文研図書館宗田文庫所蔵の、歌川芳虎が文久二（一八六二）年に描いた錦絵「麻疹後の養生」の左側には、鍾馗が描かれています。この鍾馗神は、麻疹の原因となった妖怪を征伐しています。この他にも、いくつかの非人格的な幻獣が守護神として生み出されました。

古今東西の文化には、疫病に関連すると考えられている幻獣が数多く存在しています。これら幻獣は、概ね自然界の動物を基にして生み出されたもので、種類も多く、陸、海、空の三種が揃っています。疫病の危険性は、予測不能で制御が困難であるため、疫病と幻獣の関係性は二種類に大別できます。一つは予知であり、もう一つは防衛です。予知を司る幻獣の物語は、一般的には、「その幻獣を見た時には疫病がまもなく発生する」というものです。よって人々は、この種の幻獣に感謝する一方で、恐れてもいました。そして、防衛を司る幻獣は、人間を感染から守るものと信じられ、この信仰からお守りが作られました。



図3 『新聞文庫・絵・肥後国海中の怪』（京都大学附属図書館所蔵）



図4 森元親「厄病除鬼面蟹写真」
(日文研所蔵)

レで立つイメージとして描かれました。(二) アマビエの話は次のように記録されています。

肥後国海中江毎夜光物出ル。所之役人行見るニ、づの如く者現ス。私ハ海中ニ住、アマビエト申者也。當年より六ヶ年之間、諸国豊作也。併、病流行、早々私ヲ写シ人々ニ見せ候得と申て、海中へ入けり。右ハ写シ役人より江戸江申来ル写也。

COVID-19の大流行を受けて、人々がアマビエのイメージを描き、その図柄が貼られた商品が販売されたことは、アマビエにあやかる商品として話題性があるとみなされたためと言えるでしょう。

水中のアマビエは疫病の予言者でありましたが、同じ水中に潜む「鬼面蟹」は、疫病を退散

今回のCOVID-19と最も関連している幻獣「アマビエ」は、幕末期に生まれたものです。長野栄俊の研究によると、年代の確認できる最古のアマビエの物語は、弘化三（一八四六）年四月中旬の摺物『肥後国海中の怪』に描かれています。アマビエは、長い髪と無毛の顔、独特な形の目と耳を持ち、胴体は鱗で覆われ、先が三つに割れた足また尾ビ



図5 『『暴瀉病流行日記』部分・ヨゲンノトリ』(山梨県立博物館所蔵)^(三)

させるものです。日文研の風俗図会データベースに、森光親が描いた「厄病除鬼面蟹写真」があります。この蟹は、高國を管領として担いだ浦上村宗の臣、畠村貴則が合戦に敗れて逆浪に身を投じた後、霊と化したもので、この蟹の殻を扉や窓に掛けると、疫病を取り除くことができると、とされました。

この度のCOVID-19の流行で脚光を浴びたもう一つの幻獣は、「予言の鳥(ヨゲンノトリ)」と呼ばれるものです。アマビエに比べ、ヨゲンノトリは少し遅れて出現しました。安政五(一八五八)年『暴瀉病流行日記』の記録によると、この鳥は安政四年一二月に加賀白山に出現し、このように告げました。

午年八九月の頃、世の人九分通死す。我姿を朝夕信仰する者は難を免ると豫言したりと云ふ。

アマビエとヨゲンノトリのいずれもが最初に疫病の発生を予言し、続いて信仰する者の救済と保護を約束しました。この二つの幻獣は、上述の予知と防衛の二種類の役割を、同時に担うお守りであったのです。



図6 東漢石画「扁鵲行医图」（曲阜孔子廟所蔵）

中国の場合は、多くの疫病に纏わる幻獣を『山海経』に見つけることができます。例えば、『山海経』の「東山経」には箴魚や潔鉤、蜚が見えます。また『山海経』の「中山経」には、跂踵と青耕、三足鳖や猿が確認できます。このうち、潔鉤と蜚、跂踵、さらに猿はすべて、目撃されるとすぐに疫病が発生するとされた予言的な幻獣です。潔鉤と跂踵は、予言の鳥として描かれています。青耕は特別な疫病を予防することができるとされたもので、とりわけ強い霊験を感じさせます。箴魚と三足鳖は水中に生息する幻獣で、これらを食べると疫病に感染することは無いとされました。ちなみに、三足鳖と後の江戸時代のアマビエは、どちらも三本足の水生動物です。偶然かもしれませんが、何らかの文化的な影響関係があったのかもしれない。

世界史の観点に立つと、鳥と疾病は非常に深淵な関係性を持っています。様々な文明で、鳥は病気の予言と治癒のシンボルと見なされています。山東省で発掘された東漢時代の石画に、「扁鵲行医图」があります。扁鵲様は古代中国の有名な医師で、この石画には彼の針灸治療のシーンが描かれています。興味深いことに、ここで扁鵲は、人間の頭と鳥の体を持った姿として描かれています。実際のところ、彼の名前、つまり「鵲」は、鳥を意味しています。この石画は、古代中国の鳥の図像が持つ治癒力への信仰を表現しています。

上記の予言と疫病予防の鳥のほか、『山海経』には、人間を災害から守るとされる鳥「鵩鵩（キイトウ）」が記されています。伝説によると、この鳥は「御凶（凶邪を斥ける力）」を持っています。寺島良安の『和漢三才図会』の中に、三つ頭の鵩鵩のイメージを見ることが出来ます。その後、韓国で流行した護符にも、三つ頭で一本足の鷹が描かれています。ちょうど、三つ頭の鵩鵩と片足の跂踵が組み合わさったようなものです。この背景には、何か面白い文化交流の歴史が隠されているかもしれません。

アジア以外にも、疫病に対する防御のシンボルとして鳥が使われている地域がたくさんあります。最も有名なのは、中世ヨーロッパで黒死病が発生した際に生まれた「ペスト医師」でしょう。治療に当たった医師は、自分を保護するために特別なマスクを着用しました。マスクの口と鼻の部位を、香料や葉草などで満たす必要があったので、鳥の嘴の形にマスクを製造しました。このマスクは徐々に、黒死病と大疫病の恐怖を表すシンボルとなりました。

技術の進歩の如何に関わらず、人間は、病気による苦難を完全に回避することはできません。突発的で大規模な感染症の拡大に対して、一般の民衆はおろか、科学者でさえも、自身の無力さを痛感し、絶望感に打ちひしがれることを免れません。世界の行く末は、あまりにも多くの未知数を含み、不確



図7 寺島良安『和漢三才図会』の「鵩鵩」（『東洋文庫』第44巻〔平凡社、1987年〕、347頁より）

実性に満ちています。「疫病退散」のお守りとなる様々な守護神や幻獣に関心を寄せることは、浮世を生きる人々の心の支えと慰めになっています。

謝辞

本稿を執筆するにあたって、安井眞奈美日文研教授に資料や構成について御教示いただき、またローレンス・マルソー教授と稲田健一さんにも貴重なアドバイスをいただいたことに感謝します。

(北京大学ポストドクター／国際日本文化研究センター外来研究員)

注

- (一) 長野栄俊「予言獣アマビユ考―「海彦」をてがかりに」『若越郷土研究』第四九巻第二号、福島県郷土誌懇談会、二〇〇五年、一一三〇頁。
- (二) 飯島茂「山梨縣下に於ける安政五年の暴瀉病流行日記市川文書に就いて」『中外医事新報』一二二―二六、二八二頁。
- (三) 山梨県立博物館「かいじあむ」山梨県笛吹市御坂町成田 1501-1
URL:<http://www.museum.pref.yamanashi.jp>